

『子規全集』未収録・自筆漢詩拔萃写本

— 「雑記」第三号翻刻・解題

加藤 国安

凡例

- 一、子規自筆写本「雑記」第三号（松山市正宗寺蔵の翻刻を行う）。
- 一、子規の写本は、正字・異体字・書換字・略字を縦横に混在する。子規の古典文献の文字理解の実態を知る上でもまた書き癖や筆跡を知る上でも貴重であることから、できる限り原本のまま翻字する。
- 一、その際、『子規全集』（講談社版）第八・九巻の漢詩の部の「凡例」を参考とする。当時は活字の関係で相当苦勞されたようだが、現在、漢字の専門ソフト「今昔文字鏡」（ここで使用したのは漢字十六万字版 エー・アイ・ネット社 二〇〇九年）を用いると、かなり忠実に翻刻することが可能である。
- 一、文字フォントがない場合は、下段の備考欄に偏や旁について説明を掲げる。
- 一、子規原本の行数・字数・割注も原状のまま翻刻する。
- 一、前年度の科研の成果報告書をもとに再構成したものである。

解題

『子規全集』（講談社）第九卷の渡部勝己氏「解題」に、「少年青年時代に子規は猛烈な知識欲から夥しい筆写を行っている。それをここにいちいち収録する紙面がない。若干の例を挙げておく」（八四一頁）として、その二番目に「〇雑誌 第三號 莞爾少年記 蘇東坡・陸放翁詩句拔萃。第一号・第二号もあつた筈である」と印されるのがこれである。その所蔵先を長年各方面に問い合わせたが、容易に確認できなかった。ところが、ようやく今回の調査で現在、松山市正宗寺「子規堂」に蔵されていることが分かり、まさに灯台もと暗しでこれまで気づかなかつた不明を恥じた次第である。市観光課を介してご住職の田中義晃師に資料閲覧と撮影の申し入れを行ったところ、思いがけず師には深甚なるご理解を賜り、わざわざ撮影をした上で全画像（コマ）をご提供くださった。無論、『子規全集』には未収録のものである。子規が松山時代に筆写したものと考えられ、少年期の勉学の一端を伺う上で貴重である。その作品の詩題・選録・配列等を調査した結果、清・趙翼『甌北詩話』卷五―蘇軾、同卷六―陸放翁詩とほとんど一致し、本書から抜萃したことが明らかとなつた。子規が本書をどこでどのようなテキストで閲覧したのかは分からない。

では、子規が読んだ『甌北詩話』とは一体どのような書なのだろうか。今、その概略を記す。清代の詩歌理論書で全十二巻あり、李白・杜甫・蘇軾・陸游らについてその事蹟や社会背景と関連づけながら、詩人の創作上の特色を考証的に説明したものである。当時の詩壇は古を尊び今を卑しめる風潮が強かつたが、趙翼は自身の考えにもとづき獨創性を重視した詩学を確立した。その中核をなすのは、「榮古虐今」（『甌北詩話』卷十 査初白の保守性に反対し、いかに「日爭新」「新意」「新鮮」（『甌北集』卷二十八「論詩」）であるか、また「獨創」（『甌北詩話』卷二 杜少陵）であるかを強く問う姿勢である。古いからというだけでただ有り難がり、いかに獨創性を有していたとしても現代のものなら冷遇するというのは、趙翼の詩学ではなかつた。中でも彼が重視したのは陸游で、二巻を割いて論じ

ている。ここに子規が抜萃したのが蘇軾・陸游だったというのは、趙翼の詩学の根幹を洞察し学ぼうとしたことを物語ろう。かなりの早熟であると同時に、これが彼の文学活動の出発点だったことが明らかとなったことは極めて重要である。上段は、子規写本をそのまま翻字したもの。下段は文字の注記及びその出典に関する備考である。

表紙

堯再少年記

雑記

第三号

備考…右端、紐綴。裏は白。原本では詩と詩の間に余白がないが、ここでは脚注との関係で適当な間隔をおいた。

再…爾の交換略字。

記…記の俗字。

東坡詩句拔萃

○耕田欲雨刈欲晴去得順風來者怨若
使人と禱輒遂造物応須日千変(七古)

清・趙翼『甌北詩話』卷五一蘇軾によると思われる。
以下、作品ごとに指摘する。

欲…欲の書換字。得…得の俗字。風…風の交換略字。

〔泗州僧伽塔〕

我昔南行舟繫汴 逆風三日沙吹面 舟人共勸禱靈塔

香火未收旗脚轉 回頭頃刻失長橋 却到龜山未朝飯

至人無心何厚薄 我自懷私欣所便 耕田欲雨刈欲晴

去得順風來者怨 若使人人禱輒遂 造物応須日千変

我今身世兩悠悠 去無所逐來無恋 得行固願留不惡

每到有求神亦倦 退之旧云三百尺 澄觀所嘗今已換

不嫌俗士汗丹梯 一看雲山遶淮甸

遊道場山何山(七古)

○我從山水窟中來尚愛此山看不足

『甌北詩話』卷五一蘇軾「泗州僧伽塔」の後に引用。

句の長さも同じ。遊…遊の交換略字。場…場の俗字。

〔遊道場山何山〕

道場山頂何山麓 上徹雲峯下幽谷 我從山水窟中來

尚愛此山看不足 陂湖行尽白漫漫 青山忽作龍蛇盤

山高無風松自響 誤認石齒號驚湍 山僧不放山泉出

屋底清池照瑤席 塔前合抱香入雲 月裏仙人親手植

与宗同年飲（七古）
黄鷄催曉不須愁老尽世人非我独

海外归贈鄭秀才
年來万事足所欠惟一死

出山回望翠雲鬟 碧瓦朱欄縹渺間 白水田頭問行路
小溪深處是何山 高人讀書夜達旦 至今山鶴鳴夜半
我今廢字不帰山 山中對酒空三歎

「與宗同年飲」と題するのは、『甌北詩話』卷五く
らい。他は左の詩題とする。句の長さも同じ。「遊道
場山何山」の次次詩で順番も同じ。須…須の俗字。

「與臨安令宗人同年劇飲」

我雖不解飲 把盞歡意足 試呼白髮感秋人

令唱黄雞催曉曲 與君登科如隔晨 弊袍霜葉空殘綠
如今莫問老與少 兒子森森如立竹 黄雞催曉不須愁

老盡世人非我獨

「海外歸贈鄭秀才」と題するのは、『甌北詩話』卷五
くらい。「泗州僧伽塔」のやや前に引かれる。長さも
同一。归…帰の交換略字。

「贈鄭清叟秀才」

風濤戰扶胥 海賊橫泥子 胡爲犯二怖 博此一驚喜
問君奚所欲 欲談仁義耳 我才不逮人 所有聊足已

題楊惠之塑維摩像

世人豈不碩且好身虽未病心已虧此叟神

完中有恃談笑可卻千熊羆至今兀坐

宋不語與昔未死無增虧

安能相付予 過聽君誤矣 霜風掃瘴毒 冬日稍清美
年來萬事足 所欠惟一死 澹然兩無求 滑淨空乘几

「題楊惠之塑維摩像」と題するのは、『甌北詩話』巻五くらい。「海外歸贈鄭秀才」の次次に引かれる。引用句の長さも同一。虽・雖の減画略字。虧・虧の書換字。叟・叟の俗字。笑・笑。熊・熊。羆・羆。趙翼、「熊羆」の後の二句を略す。また「兀坐宋(寂の本字)」は、普通は「遺像兀」に作る。趙翼が何に拠つたかは不明。

「維摩像唐楊惠之塑在天柱寺」

昔者子輿病且死 其友子祀往問之 跼蹐鑿井自嘆息
造物將安以我爲 今觀古塑維摩像 病骨磊嵬如枯龜
乃知至人外生死 此身變化浮雲隨 世人豈不碩且好
身雖未病心已疲 此叟神完中有恃 談笑可却千熊羆
當其在時或問法 俛首無言心自知 至今遺像兀不語
與昔未死無增虧 田翁俚婦那肯顧 時有野鼠嚼其髭
見之使人每自失 誰能與結無言師

趙閑道高齋

長松百尺不自覺企而羨者蓬与蒿

やはり『甌北詩話』卷五にあり。「與宗同年飲」の次に引かれる。引用句の長さも同一。他の蘇軾詩集も「趙閑道高齋」と題する。齋・齋の交換略字。

「趙閑道高齋」

見公奔走謂公勞 聞公隱退云公高 公心底處有高下
夢幻去來隨所遭 不知高齋竟何義 此名之設緣吾曹
公年四十已得道 俗緣未盡餘伊臯 功名富貴俱逆旅
黃金知繫何人袍 超然已了一大事 挂冠而去真秋毫
坐看猿猴落罔罔 兩手未肯置所操 乃知賢達與愚陋
豈直相去九牛毛 **長松百尺不自覺 企而羨者蓬與蒿**
我欲贏糧往問道 未應舉臂詞虛敖

登玲瓏山

脚力尽時山更好莫將有限趁無窮

やはり『甌北詩話』卷五にあり。「趙閑道高齋」の次に引かれる。引用句の長さも同一。無..無。

何年僵立兩蒼龍 瘦脊盤盤尚倚空 翠浪舞翻紅罷亞
白雲穿破碧玲瓏 三休亭上工延月 九折巖前巧貯風
脚力盡時山更好 莫將有限趁無窮

江漲

龍捲魚鰈并^レ雨落人随鷄犬上牆眠

やはり『甌北詩話』卷五にあり。「登玲瓏山」のやや後に引かれる。引用句の長さも同一。龍…龍。捲…捲。鰈の旁…「目十爻」。鷄…「目十十鳥」。

「江漲」

越井岡頭雲出山 梓柯江上水如天 牀牀避漏幽人屋

浦浦移家蛭子船 龍卷魚鰈并雨落 人随雞犬上牆眠

祇應樓下平堵水 長記先生過嶺年

与潘郭二生同遊憶去歲旧蹟
人似秋鴻來有信事如春夢了無痕

やはり『甌北詩話』卷五にあり。「江漲」の次次に引かれる。長さは半分。元の引用は「此數聯固坡集中最雄偉之作、然非其至也。人似秋鴻來有信／事如春夢了無痕」で、上の説明部分を略して、下の句のみを筆写したもの。「與潘郭二生同遊憶去歲旧蹟」の詩題も同一。潘…「目十番」（減画略字）。郭…郭の書換字。歲…歳の交換略字。夢…夢の交換略字。

「正月二十日與潘郭二生出郊尋春、忽記去年是日同至女王城作詩、乃和前韻」

東風未肯入東門 走馬還尋去歲村 人似秋鴻來有信

事如春夢了無痕 江城白酒三杯釀 野老蒼顏一笑温

夜直五堂

醉眼有花書字大老人無睡漏舌長

已約年年爲此會 故人不用賦招魂

「夜直五堂」と題するのは、『甌北詩話』卷五くらい。

「與潘郭二生同遊憶去歲旧蹟」のやや後に引かれる。

引用句の長さも同一。睡…「目十缶」。舌…聲の交換略字。

「臥病逾月請郡不許復直玉堂。十一月一日鑲院是日苦寒、詔賜官燭法酒書呈同院」

微霰疎疎點玉堂 詞頭夜下攬衣忙 分光御燭星辰爛

拜賜官壺雨露香 **醉眼有花書字大** **老人無睡漏聲長**

何時却逐桑榆暖 社酒寒燈樂未央

章質君寄酒六壺書到酒不到
豈意青州六從事化為鳥有一先生

章質君寄酒六壺書到酒不到」と題するのは、『甌北詩話』卷五くらい。「夜直五堂」のやや後に引かれる。長さも同一。章…章の書換字。

「章質夫送酒六壺、書至而酒不達、戲作小詩問之」

白衣送酒舞淵明 急掃風軒洗破觥 **豈意青州六從事**

化為鳥有一先生 空煩左手持新蟹 漫繞東籬飄落英

南海使君今北海 定分百榼餉春耕

陸放翁詩句拔萃

海中宿雨初霽

浪蹴半空白天浮無盡青

夢仙

天逼星辰大霜清劍佩寒

寒甚

酒尽瓶枵腹ろ寒客曲身

『甌北詩話』卷六陸放翁詩に、この詩題でこの長さで引かれる。蹴の京…京。

「海中酔題時雷雨初霽天水相接也」

羈遊那復恨 奇觀有南溟 浪蹴半空白 天浮無盡青

吐吞交日月 瀕洞戰雷霆 醉後吹橫笛 魚龍亦出聽

（『劔南詩稿』卷一）

『甌北詩話』卷六に、「海中宿雨初霽」の後にこの詩題、この長さで引かれる。辰…辰の異体字。佩…佩

・珮の異体字。

「夢仙 夢朝謁大官殿仰視去天甚近星皆大如月氣候清寒如十月間時庚子六月一日也」

中宵遊帝所 廣殿綴仙官 天逼星辰大 霜清劍佩寒

賦詩題碧簡 侍宴跨青鸞 惆悵塵緣重 夢殘更未殘

（『劔南詩稿』卷十一）

『甌北詩話』卷六、「夢仙」の後に、この詩題、この長さで引かれる。甚…甚の書換字。瓶…「并十瓦」。枵…「木十号」。ろ…炉（爐）の略字。

「雨後寒甚」

陂澤連山脚 風煙接海濱 孤鴻悲遠客 殘菊伴陳人
酒盡瓶枵腹 爐寒客曲身 老翁殊耐事 一笑自回春

（『劔南詩稿』卷六十四）

村居

雨昏鷄共懶米尽嵐同饑

『甌北詩話』卷六、「寒甚」の後に、この詩題、この長さで引かれる。鷄…「二十天十鳥」。

「初夏」

筍生遮狹徑 溪漲入疎籬 漸及分秧候 還當裹繭時
雨昏雞共懶 米盡嵐同飢 村巷無來客 清嵐只自知

（『劔南詩稿』卷二十四）

村夜

月昏天有暈風軟水無痕

『甌北詩話』卷六、「村居」の後に、この詩題、この長さで引かれる。

「村夜」

寂寂山村夜 悠然醉倚門 **月昏天有暈 風軟水無痕**
迹爲遭讒遠 身由不仕尊 敢嗟車馬絕 同社自雞豚

（『劔南詩稿』卷二十七）

夜坐

風生雲尽散天濶月徐行

『甌北詩話』卷六、「村夜」の次に、この詩題、この長さで引かれる。濶の門…門。除…「イ+余」。この「余」は子規の書き癖でよく見られる。

「月下小酌」

草樹已秋聲 郊原喜晚晴 風生雲盡散 天闊月徐行

下箸槎頭美 傳盃甕面清 追歡猶可勉 徂歲不須驚

(『劔南詩稿』卷二十一)

秋懷

病對有凋葉殘蟬無壯声

『甌北詩話』卷六、「夜坐」の後に、この詩題、この長さで引かれる。對…樹の古字。葉…葉。「秋懷」

秋暑雖猶在 晨興氣已清 蠻童掃荒徑 獠婢滌空甕

病樹有凋葉 殘蟬無壯聲 書生守故態 已復理燈檠

(『劔南詩稿』卷六十八)

埭西

三家小聚落兩姓世婚姻

『甌北詩話』卷六、「秋懷」の後に、この詩題、この長さで引かれる。姻の大…「太」。子規の書き癖。

「埭西小聚」

瓦盎盛蠶蛹 沙壘煮麥人 三家小聚落 兩姓世婚姻

過吉澤

木落山尽出鐘鳴僧独归

父老衣冠古 閨閻風俗淳 不應陶靖節 獨號葛天民
（『劔南詩稿』卷八十二）

『甌北詩話』卷六、「埭西」の後に、この詩題、この長さで引かれる。鐘の扁…「金」。これも子規の書き癖の一つ。

「小舟過吉澤効王右丞」

澤園霜露晚 孤村煙火微 本去官道遠 自然人迹稀

木落山盡出 鐘鳴僧獨歸 漁家閑似我 未夕閉柴扉

（『劔南詩稿』卷三十七）

野望

径行橋独木佇立路三义

『甌北詩話』卷六、「過吉澤」の後に、この詩題、この長さで引かれる。径…「入十土」。子規の書き癖。
「舍北野望」

斷壠圍蔬圃 枯桑繫釣查 經行橋獨木 佇立路三义

野卉棲孤蝶 平川起亂鴉 櫓節無定處 興盡即還家

（『劔南詩稿』卷三十八）

小立

荒坡舟護鴨斷岸笛呼牛

『甌北詩話』卷六、「野望」のやや後に、この詩題、この長さで引用。荒…荒の書換字。子規の書き癖。「小立」

紅樹園廬晚 碧花籬落秋 荒陂船護鴨 斷岸笛呼牛

酒賤村村醉 山寒寺寺幽 聊須岸鳥幘 小立埭西頭

(『劔南詩稿』卷四十八)

明覺寺

藤絡將頽石松號不斷風

『甌北詩話』卷六、「小立」のやや後に、この詩題、この長さで引かれる。明…明の書換字。『康熙字典』にあり。子規の博字さが窺われる。號…號の異体字。「明覺院」

細路蟠青壁 層軒倚碧空 天香下塵世 僧梵起雲中

藤絡將頽石 松號不斷風 尤憐扶杖處 直下數飛鴻

(『劔南詩稿』卷十七)

徙倚

月正對無影露濃荷有声

『甌北詩話』卷六、「明覺院」の次々に、この詩題、この長さで引かれる。「徙倚」

道室

茶鼎声号 蚓香盤火度_レ螢

漁扉夕不掩 徙倚欲三更 月正樹無影 露濃荷有聲

崢嶸歲將晚 悄愴恨難平 坐念中原沒 男兒恐浪生

(『劔南詩稿』卷十四)

『甌北詩話』卷六、「徙倚」の後に、この詩題、この長さで引かれる。昇・鼎の俗字、一般的には昇。子規の博字。

「道室夜意」

寒泉漱酒醒 午夜誦仙經 茶鼎聲號蚓 香盤火度螢

齋心守玄牝 閉目得黃寧 寄語山中友 因人送茯苓

(『劔南詩稿』卷九)

巢山

虫鏤葉成篆 風蹙水生紋

『甌北詩話』卷六、「道室」の後に、この詩題、この長さで引かれる。虫・蟲の国字。鏤の旁・叟。叟を叟と写すのも子規の書き癖。

「巢山」

巢山避世紛 身隱萬重雲 半谷傳樵響 中林過鹿羣

虫鏤葉成篆 風蹙水生紋 不蹋溪橋路 僊凡自此分

(『劔南詩稿』卷三十二)

秋懷

蟻知軍陣法 聿作緯車聲

「秋懷」

『甌北詩話』卷六、「道室」のやや後に、この詩題、この長さで引かれる。

獨立離人境 幽居察物情 **蟻知軍陣法** **蟲作緯車聲**

身老惟貪睡 兒癡亦惰耕 騰騰復兀兀 何以報時平

（『劍南詩稿』卷七十七）

近遊

十里溪山最佳處 一年寒暖適中時

「遊近山僧菴」

『甌北詩話』卷六、「道室」の次に、この詩題、この長さで引かれる。遊・遊の交換略字。

臥看香穗嘆吾衰 起著芒屨信所之 **十里溪山最佳處**

一年寒燠適中時 眼明竹院如曾到 心許沙鷗卜後期

不是詩人託高興 日長真付一枰棋

（『劍南詩稿』卷七十八）

遊西山村

山重水複疑無路 柳暗花明又一村

「遊山西村」

『甌北詩話』卷六、「近遊」の次に、この詩題、この長さで引用。西山・山西の誤写。柳・柳の書換字。

(以下、和歌・発句の拔萃―略―や漢詩の断句が続く。漢詩は典拠不明のものが多いが、次に掲げる。)

楼客羨舟と客楼

帆影穿田認肱水

鷄犬巷中欵斜踈松短竹両三家

細雨沾芳草春風別故人

楓丹松翠彩連山

千梳鬢雪空嘆老一寸心丹未得伸

酒為多憂愈有債文固才粗遂無名

天地之大不容尔神蟻封之小亦安尔身(写真賛)

何日功名堪唾手尋常利達懶回頭

莫笑農家臘酒渾 豐年留客足雞豚 山重水複疑無路

柳暗花明又一村 簫鼓追隨春社近 衣冠盡朴古風存

從今若許閑乘月 拄杖無時夜叩門

(『劔南詩稿』卷一)

楓…「木十凡」

梳…「木十允」。「允」は子規の書き癖。

『陸羯南詩集拾遺』「留別加藤審叔 明治十二年」
…「口十缶」。尋常利達…尋常利口に作る。懶…「十

秋随湖水濶雲向越山多

行尽琵琶海上天孤松如画月如烟

有時診王公有時視乞兒(医)

病痼苦求良藥石才非難著快文章

万井晴開桂水東

十頼」。同年四月、羯南と拓川らが司法省法学校を放校になった時のものだろう。子規の叔父への関心を示す貴重なもの。

濶の門…門。

『龍州廬先生集』初編卷五「過湖」月…原本は「州」に作る。

付記 本稿は、平成24年度科研費基盤研究(C)「子規文庫蔵漢籍に見る漢字文化圏の詩的ダイナミズム」(代表 加藤国安)による報告書の一部である。